

解熱剤の使い方

小児科の外来において、「発熱」は「咳」と同様に最も多い症状の一つです。ですから小児科で使う薬の中で、「解熱剤」は頻度の高い薬の一つです。しかし、解熱剤の使い方については、絶対的なものはありません。発熱に対する考え方も最近では変わってきましたし、先生によって考え方も違うからです。

お母さん方に知っておいて頂きたいのは、①発熱は体にとって決して悪い反応ではないこと ②解熱剤は抗生物質とともに最も副作用の多い薬であること です。

①について — 小児の発熱の原因の多くは、かぜ症候群、急性咽頭炎、急性扁桃炎、急性気管支炎、急性肺炎などの「気道感染症」であり、また、そのほとんどはウイルスによっておこる感染症です。その時に体は発熱することによって体の免疫反応を高めようとします。つまり、白血球を刺激して活動をさかんにし、ウイルスや病原菌をやっつけようとするのです。

②について — 成人に使用する解熱鎮痛剤は何十種類もの薬がありますが、現在子供に使用される解熱鎮痛剤は1～2種類しかありません。それは、以前使われていた解熱剤も副作用がわかってきて使用禁止になったものが多くあるからです。たとえば有名なのは小児用バファリンです。これにはアスピリンが入っていたのですが、「ライ症候群」という脳の異常が起こることがわかり使用禁止となりました（現在販売されている小児用バファリンには違う解熱剤が入っています）。また、インフルエンザの時にボルタレンという解熱剤を使うと脳炎・脳症の死亡率が高くなることが報告されました。ですから、子供に大人の解熱剤を少量使用するという事は絶対にしないで下さい。

①②の理由で、できれば、なるべく解熱剤は使わない方が良いと思います。

以上のことを理解した上で**解熱剤の使用法**をまとめてみます。

- ①原則的にはなるべく使わないようにすること。使う場合には小児科で処方された小児用の解熱剤に限ること。5～6か月以下の乳児には特になるべく使わない。
- ②使う場合には頓用（一時的に使うこと）を原則とする。使用間隔は最低でも5～6時間以上あけること。
- ③シロップ剤も粉薬も坐薬も同じ解熱剤であるから、使用間隔は同じように5～6時間以上とする。但し1日2回以内が原則。
- ④何度以上になったら使ってよいという基準はないので、子供の状態をみて使う（高熱により寝つけない、ぐったりしているなど）。一般的には38.5℃以上。
- ⑤熱性けいれんのおきやすい子供の場合には特に注意して使うこと。できれば抗けいれん剤の坐薬を先に使う。
- ⑥大人や大きい子供にもらった解熱剤を、小さい子供に少量使うようなことはしない。

